

教養ゼミナール

松根伸治 (大学教育開発センター)

現在多数の大学で実施されている初年次ゼミナール (First Year Seminar = FYS) は、新入生にその大学の一員であるという自覚をうながすとともに、学業意欲を向上・持続させるためにおこなわれる少人数の参加型授業である。そのおもな目的はたとえば、大学教育の体感、討論や共同作業のマナーの習得、基本的な読み書き能力の向上、他専攻の学生や教員との交流などとされる。高校生から大学生への脱皮をうながす「転換教育」の側面と、高大のスムーズな連携をめざす「導入教育」の側面とを有する点から、多くの大学で重要な授業として位置づけられている。香川大学でも平成7年度から教養ゼミナールを本格的に始動させ今日にいたっている。

大教センター共通教育部・調査研究部では、教養ゼミナールの改善を今年度＝平成18年度の大きな課題のひとつと考え、いくつかの調査や企画をおこなってきた。本稿では、まずその取組みの概要を紹介し、本学における教養ゼミの位置づけと意義を再確認した後で、現状と問題点を整理することにした。

(なお、以下の文章は、教養ゼミ担当者に配布した『教養ゼミナール実践のための参考資料』、FD研修会「教養ゼミ分科会資料」と重複する箇所があることを、あらかじめお断りします。)

1. 今年度の取組み

教養ゼミの改善は今年度にもち越された宿題であった。「教養ゼミナールについては、ともすれば教員の自由判断で実施されている傾向を廃し、大学生としての基本的な資質を養成する導入教育としての教育目標に忠実な内容に修正する。このため、標準的な授業内容を提示するなど、科目の意義・教育目標を徹底できるシステムを構築する」(平成17年9月16日、教育研究評議会決定「全学共通科目の再編方針」)という目標を実現し、「教育目標に沿った教養ゼミナールを実施する」(平成18年度年度計画)のために、今年度以下のような取組みをおこなってきたところである。

- ・ 5月22日 共通教育実施委員会で、「教養ゼミナール手引き作成」ワーキンググループを設置。
WGメンバー：中谷博幸(共通教育部長)、藤井篤(教養ゼミナール部会長・法)、中西俊介(調査研究部長)、葛城浩一(大教センター)、松根伸治(大教センター)。
- ・ 6月～7月 WGが四回の会合を重ね討議と作業。各学部や担当者からの聞き取り、現状分析、理念や位置づけの再確認、「手引き」作成のための編集作業などをおこなった。
- ・ 8月3日 共通教育実施委員会で、文書「教養ゼミナールの位置づけ」について議論し、一部改訂のうえ承認。(次頁以降に全文を掲載)
- ・ 8月3日 カリキュラム編成委員会で共通教育部長から教養ゼミ改善のための提言——医・工・農学部担当ゼミの幸町キャンパスでの一部開講、経済学部の開講コマ数増加、教育学部の必修制

再考、の三点。

- ・ 8月25日 上記提言の主旨説明「教養ゼミ改善のために」を各学部の共通教育カリキュラム編成委員へ送付。資料『教養ゼミナールの現状と問題点』『教養ゼミナール実践のための参考資料』もあわせて送付。『参考資料』には、興味深いゼミをおこなっていらっしゃる担当者のなかから七名の方に「教養ゼミナールの実践例」を執筆していただいた（内容は、ゼミナール概要、目的・達成目標、形式と実際の進め方・手順、目標達成や運営のために工夫している点、問題点、である）。
- ・ 9月上旬 今年度教養ゼミ担当者に『教養ゼミナール実践のための参考資料』を配布。
- ・ 9月上旬 大教センター調査研究部が「教養ゼミナール実践例アンケート」を作成し、今年度前期担当者に回答を依頼。回収結果を集計。
- ・ 10月25日 FD講演会「初年次少人数ゼミのあり方を考える」を開催。高橋正克先生（長崎大学大学教育機能開発センター教授・副センター長）による講演「教養ゼミナールの挑戦——全国の動向と長崎大学の実践例」と質疑応答。（内容は『香川大学大学教育開発センターニュース』No. 8に掲載の記事を参照）
- ・ 12月5日 FD研修会第2部・教養ゼミ分科会を企画・実施。藤井篤教養ゼミナール部会長の司会で、お二人の先生に実践報告をしていただき、質疑応答をおこなった。（分科会の記録は本誌後段を参照）

2. 教養ゼミの位置づけと意義

はじめに、共通教育実施委員会（平成18年8月3日）において討議のうえ承認した文書「教養ゼミナールの位置づけ」を引用する。

教養ゼミナールの位置づけ

教養ゼミナールの意義については、『全学共通科目修学案内』において、以下のように記載されている。

教養ゼミナールは、1年次の学生を対象とし、特定のテーマに関して担当教員の指導のもとに少人数の学生が共同で研究学習するゼミナール形式の授業である。

すでに古くから指摘されているように、大学教育は、演習と講義が相互に補完しあってこそ教育効果が上がる。教養ゼミナールは、授業科目の詰め込みだけに追われてきた新入生に対して、学問のなんたるかを少人数教育で会得させ、学問の楽しさを知らせる機会を与えることを意図している。

これまでの一般教育科目の講義は、ややもするとマスプロ教育に陥り、新入生の学習意欲を低下させてきたとの批判がある。講義形式の多人数教育のみでは、新入生がこれまで慣れ親しんできた、与えられた知識の吸収を主とする受講態度から脱することは困難であろうと考えられる。

そこで、教養ゼミナールでは、大学教育の新鮮味を感受させつつ、教員と学生間の交流を通じて人

格形成を促すとともに、発表・討議を通じて論理的思考力、表現力、批判力を養うことを目的とする。この科目が、講義を受動的に聞くだけの聴講型学生から授業に積極的に関わる参加型学生への転換を図るための一助となることを期待する。

この記載をもとに、若干の補足を行なうことにより、教養ゼミナールの全学的な位置づけを明確にしたい。(以下、1)～3)の内容は互いに重なり合っている。)

1) 「発表・討議を通じて論理的思考力、表現力、批判力を養う」

教養ゼミナールは、大学生として専攻分野の如何を問わず身につけるべき知的技法(本の読み方、レジュメの書き方、プレゼンテーションの仕方、討議の仕方、情報の集め方等々)の具体的な習得を通じて、論理的思考力や批判力を養うことを目的とする。また教養ゼミには、「講義を受動的に聞くだけの聴講型学生から授業に積極的に関わる参加型学生への転換を図」り、高校生から大学生への脱皮をうながすというねらいもある。このように、教養ゼミは特定の学問分野に必要とされる基礎能力を養うことを第一に意図するものではない。

2) 「教員と学生間の交流を通じて人格形成を促す」

教養ゼミナールは、「担当教員の指導のもとに少人数の学生が共同で研究学習するゼミナール形式の授業」である。当たり前のことであるが、講義の比重が担当教員に有るのに対して、ゼミナールは参加する学生に比重が置かれるため、どのような学生が参加するかによってゼミナールの性格は異なってくる。学部が行なうゼミナールは、それが導入のものであれ、専門の訓練のためのものであれ、専門を同じくする学生によって構成される。一方、教養ゼミナールは、香川大学の一年生を対象としており、様々な学部属する多様な学生たちによる知的交流が期待されている。また自分の所属する学部とは異なる教員のゼミナールに参加して知的・人格的関わりをもつことができるのも、専門のゼミにはない教養ゼミの利点である。それが、総合大学としての香川大学への帰属意識を学生の中にはぐくむことにもなるであろう。従って、ひとつのゼミにできるだけ多様な学生が参加できるような配慮や、他学部の教員のゼミにも参加しうる環境づくりが必要である。

3) とりあげるテーマに関して

「特定のテーマ」とは、詳しい専門的なテーマでないことは、もちろんのことである。高校を卒業して大学に入学してきた新入生に対して、与えられた知識の習得を中心とするこれまでの学習態度から抜け出して、「学問のなんたるか」、「学問の楽しさ」に触れる機会を提供することが主眼であって、専門的な知識の習得自体を目指すものではない。また学生の側から言えば、多様なテーマの中から各自関心のあるテーマを選ぶことができる。2)と関連するが、その場合、他学部の教員が開講しているゼミや、他学部で研究されているテーマを選択することには、積極的な意味がある。専門と異なるテーマを新入生の時点で、少人数の学生とともに探求する経験は、知的関心を広げることに役立ち、専門の学問を研究するようになったときに、その専門性の視野を広げることに貢献するであろう。

この文書によれば、本学の教養ゼミの三本柱はあらためて以下のようにまとめることができる。

- A) 大学生・社会人として必要な知的技法の基盤の育成
- B) 学部混在型の学生と教員による少人数での知的交流
- C) 大学での参加型・能動型学習への転換ないしは導入

A) で言う知的技法とは、具体的に言えば、批判的な読書法、わかりやすく整理された配布資料の書き方、相手を説得する話術や論駁のための討論法などである。もちろんそういったものは一朝一夕に身につくものではなく、多くの失敗と実践を通して自分で身につけていかななくてはならないものであって、わずか半年、十数回の授業で伝えることのできる量は限られている。また、学生が将来専攻する分野や進む職種で必要となる具体的な技術の内容は多岐にわたる。さらに、技術はかならず具体的内容と特定の目的を伴うから、個々のゼミにおいては、担当教員の専門分野やゼミのテーマによって、当然、目標とするものに多様性がありうるだろう。しかしやはり、大学生である限りぜひとも身につけてもらいたい一定の知的技法の水準というものは確かに存在すると思われる。

今後様々な知識や技術をそれぞれが蓄積、洗練させていくための確実な基盤や習慣をわずかなりとも学生の中に形成すること、これが教養ゼミに求められている使命である。知的態度の育成と言ってもよい。特定のテクニカルな面——たとえば、図書の検索技術、ワープロなどの基本的操作、ディベートでのかけ引きなど——に焦点を絞ったゼミ運営もありえるが、それらもやはり、ものを知ることや考えることを重んじる知的な態度と結びついてはじめて意味のある技となるはずである。

B) 本学のひとつの魅力は六つの学部を擁する総合大学であるという点である。もちろん学生はそれぞれの学部を志望し、その学部へ入学するわけだが、しかし、多様な学問分野や多様な研究方法の存在を知ることができるのは、総合大学の学生に与えられた大きなメリットである。若いうちに多様性へと開かれた柔軟な心をもつことは、その後の大学生活や社会人としての人生にきわめて有意義である。このように、教養ゼミの大きな柱のひとつは、自分とは異なる学部に所属する学生や教員と身近に接し、その人たちの様々な興味や考え方を実感できること、そして多彩なテーマの中から関心のあるものを自分の専門分野に関わらず選び取ることができることである。この点で、各学部が提供する初年次向けの少人数教育とは決定的に性格が異なっている。

C) 自分で進んで調べ考える態度、好奇心をもって物事を探求する姿勢を養い、単に座って情報を呑み込むだけの勉強の態度から、大学生らしい学習態度への転換のきっかけを与えるひとつの機会として、教養ゼミは提供される。少人数での討論や、協力しながらの調査などを体験したことのない学生に、ある種の知的衝撃を与え、「ああ、大学ってこういう勉強をするところなんだ」という新鮮な意識を芽生えさせる絶好のチャンスである。しかし、初年次教育である限り、大学での勉学生活へのスムーズな橋渡しの役割をも同時に果たさなくてはならない。いきなり新しい知的世界へ放り込まれてすぐに順応できる人はまれである。今までの受身的勉強のほうがましだとか、自分にはこんな初めての学習方法は無理だとか、そんなふうに使わせてしまえば、学生を最初からつまづかせることになりかねない。その意味で、転換と導入のバランスが、新入生にとって意義のある教養ゼミをおこなうためには必要だろう。

今やすでに「教養」の二文字は、名称上は教養ゼミナールにしか残っていない。そこで目指されている「教養」は、上で述べたことに沿って言えば、基本的な知的態度と知的技法の習得（教養A）、多様性を理解し受け入れる素地の育成（教養B）と特徴づけることができようか。両方とも、将来さらに大学教育を受け、専門研究を進めるための土台となり方向づけを与える重要な要素である。そして、大学教育全体への心理面での導きという意義も忘れることはできない。少人数での知的な切磋琢磨を通して学問の一端にふれることで、受験生は晴れて大学生となり、新しい世界に迎え入れられた安堵と、この大学のどこかに自分の居場所を見つけることができるという期待を抱くようになるだろう。このような意義をもち、さらには、「人格陶冶＝教養 Bildung」なる理想峰をも（はるか遠くにはあれ）視野に入れる教養ゼミナールに課せられた役割は、きわめて重大と言わなければならない。

3. 現状と問題点

さて、いささか大風呂敷を広げて理想像を語りすぎたので、今度は現実を直視することにしよう。上述のような重要な位置づけと意義を与えられている本学の教養ゼミであるが、様々な事情から多くの問題を抱えている。各種のアンケート結果や部会の議事録などを読むと、「教養ゼミは制度疲労に陥っている」「そろそろやめたほうがよい」という意見もある。そしてもしかしたら、熱心に授業計画を立て、準備に時間を費し、教養ゼミの果たすべき役割について真摯に考えてくださる教員ほど、そのような徒労感を感じていらっしゃるかもしれないとも思う。教養ゼミの課題のなかには、一人ひとりの教員が自分の担当するゼミに関して努力することで解決に向かう種類のものもあれば、学部単位や大学全体として枠組みや制度上の変更を真剣に考えなくてはならないものもあるからである。

各学部委員や担当者への聞き取り、担当者アンケートなどにもとづいて、以下に意見、現状、問題点をまとめる。（アンケート結果の一覧については、紙幅の都合上ここでは省略します。来年度の教養ゼミ担当教員に配布するハンドブックに掲載予定です。）

(1) 授業形式と内容

1クラスの受講人数が多いこともあって、現在は数グループに分かれての調査・発表・作業などを取り入れた形式が増え、旧来の単純な輪読形式は減っている。ただしグループ活動がうまく機能しているゼミもあるが、やかましすぎて隣室のゼミに注意した、あるいは隣室の教員から注意を受けたとの報告もある。どのような形式や進め方でゼミをおこなうべきか迷っている担当者もあるので、ある程度の方向性と、参考になる実例が示されるとよい。しかしそうは言っても、教養ゼミを生かすためには方法や内容を細かくマニュアル化・画一化することは望ましくない。

内容面では、教員の専門分野にあまりに偏った難解なものや、最初から特定学部の学生だけをターゲットにしたものは問題である。実際、現在開かれている教養ゼミのなかには、一年生向けのゼミとしては内容が高度すぎるものがあるように思われるが、それらはむしろ、“高学年向け教養ゼミ”のような形で開講する方法もあるのではないか。

(2) 目標と意義

各担当者の考えの実例を列挙してみる。(A) まず、広い意味での「知的技法」派——資料収集・調査能力。わかりやすい資料作成の方法。作文力。プレゼンテーション能力。討論と司会の技術。コミュニケーション能力。グループでの共同作業。読み・書き・そろばん (= コンピュータ)。ワープロを使ったレポート作成。パワーポイント使用技術。論理的思考力。問題発見能力。自分から積極的に考える力。各テーマに応じた具体的目標。〇〇の基礎知識。(B) 「多様」というキーワードをあげる担当者もある——多様なものの見方を身につけさせる。多様な学部 of 学生、自学部以外の教員との身近な接触。(C) それ以外の心理的・情緒的要素を重視する意見——初年次学生に対して大学や学部への帰属意識を育てる。高校から大学生活へのスムーズな適応に役立てる。

このように、個々の担当者がかかげる目標は多様である。理念の面でのゆるやかな意思統一のもとで、身につけさせたい知的技法について、アンケート集計やFDでの討論などを通じて、一定のモデルや達成の目安(教養ゼミのミニマム・エッセンシャルズ)を提示する必要があるだろう。

(3) 成績評価

出席を大前提として、レポート・発言内容・討論への参加態度などを評価基準にする担当者が多いが、試験と違って成績が点数化しにくい。ゼミごとに成績のつけ方が違いすぎるので、教養ゼミ全体である程度統一した基準がほしいとの意見もある。担当者が感じている具体的な問題点や苦労はたとえば以下である。グループ単位で調査や発表をおこなうと、個々人の厳密な成績判断は困難。受講人数が多すぎて、ゼミといっても個人の特性が把握できない。また、少人数で熱心な取組みが目に見えるので、採点者としてはどうしても甘くなりがちで、他の科目群の成績との差が大きく、学生にとって不公平になるのではないか。

平成18年度前期の成績を他の科目群と比較してみると、たしかに教養ゼミの成績優秀者の比率は高いが、授業の性質上ある程度やむを得ない面もあるので、許されないほど不当に高いとは言えないようにも思われる。

	主題科目	教養ゼミ	共通科目	既修外語	初修外語	健康スポ
1. 出席率	0.73	0.89	0.69	0.89	0.89	0.89
2. 合格率	0.91	0.98	0.86	0.96	0.96	0.97
3. S+Aの率	0.44	0.77	0.41	0.41	0.44	0.67
4. Sの率	0.08	0.17	0.10	0.11	0.13	0.08

$$1 = \text{アンケート回答数} / \text{履修登録者数} \quad 2 = (S + A + B + C) / \text{成績登録者数}$$

$$3 = (S + A) / \text{成績登録者数} \quad 4 = S / \text{成績登録者数}$$

(4) 受講者数と抽選

現在は定員25名で、それを超えた場合は抽選をおこなっている。定員一杯のクラスもあれば、5、6名のクラスもあり、ゼミごとに人数のばらつきが大きい。例年平均すれば1クラス20人程度になる。定員が多すぎて、ゼミが目指す全員の積極的参加が実現しにくいという問題がある。定員25名は多すぎるという意見が多いが、班活動やグループワークなどを取り入れた形式ではちょうどよい

という場合もあり、内容や方法によって一概には言えないようである。逆に、ひとケタの少人数のために割く労力負担は非効率・不経済なので、団体旅行のような「最低開催人数」を設定できないかとの声も聞かれる。

また抽選に関しては、第1希望以外で回ってきた学生のなかにはやる気のない者がいる点、また現在、教育学部だけが必修にしているため抽選が第7希望まで（他学部は第3希望まで）認められていることに対して、他学部学生に不公平感がある点が指摘されている。必修の問題は現在、教育学部で検討していただいている最中である。

(5) 学部構成と開講場所

受講生は各学部にわたるほうが望ましいという担当者の意見が多い。理由として、様々な学部の学生の混じった少人数ゼミに参加すること、あるいは、自分の専門分野以外の教員を身近に知ることの意義などがあがっている。教員にとっても各学部のカラーが見えて面白いとのこと。しかし逆に、学部間の学力差などを理由に、受講者は単独学部のほうがよいという意見も少数だがある。学部混在型の学生と教員の交流という教養ゼミのひとつの柱を実現するためには、「分散キャンパス」が大きな問題である。これは平成7年度の教養ゼミ開始当初から、皆が頭を悩ませてきた問題のようである。（当時は、教育学部・経済学部・法学部・農学部の四学部。『香川大学教養教育研究』創刊号、1996年、41～44頁参照。）

現在は、教育学部・経済学部・法学部・各センターの教員は幸町キャンパスで、医学部・工学部・農学部教員はそれぞれ自学部キャンパスで開講しているため、開講場所は文字通り四散している。したがって、地理上、時間割上の理由から、医・工・農ではほぼ当該学部生しか受講できないのが現状である。他方、医・工・農の学生のなかには幸町キャンパス開講のゼミに参加している人も毎年一定数いる。——受講生が特定の学部集中しているゼミが多数存在する現状は、本来の教養ゼミの姿からは好ましくない。各学部の事情を十分ふまえながら、これらのゼミのうち一部でも幸町キャンパスで開くなどの措置が必要だろう。交通手段がなかったり、学部での担当授業が詰まっていたりで、すぐには解決できない問題であるが、次年度は工学部担当のゼミのうち1コマが幸町で開かれることが決まっている。

ここ三年間の教養ゼミの登録人数と学部構成は以下の通りである。

平成16年度：1182名登録、58コマ開講、1クラス平均20.38名

教233、法162、経247、医131、工258、農151

平成17年度：1120名登録、55コマ開講、1クラス平均20.36名

教235、法124、経217、医134、工260、農150

平成18年度：926名登録、53コマ開講、1クラス平均17.47名

教223、法133、経26、医142、工258、農144

今年度の開講日程・キャンパス・コマ数は以下の通り。前期金3・幸町18、前期水1・医学部（三木町）8、前期水3・工学部（林町）13；後期金3・幸町7、後期水4・農学部（三木町）7。なお、来たる平成19年度は57コマ開講の予定である。

学生による授業評価アンケート

「学生による授業評価アンケート」では、教養ゼミは他の科目群に比べてどの項目も高い評価である。たしかに少人数の授業は学生の評価が高くなる傾向があるが、やはり担当者の授業運営上の努力や、学生に学習をうながす工夫が正當に評価されていると言える面も大きいと考えられる。平成18年度前期の集計結果を以下にあげる。データでひとつ気にかかる点は、教養ゼミの眼目のひとつである「教員や学生間の活発な議論や協力」の項目の平均が4点に満たないことである。授業の目標から言うと、もう少しこの値が高く出るのが望ましいのではなからうか。この項目について授業ごとのデータを調べてみると、授業間の数値のばらつきが非常に大きいことが平均値を下げているのがわかる。

		主題科目	教養ゼミ	共通科目	既修外語	初修外語	健康スポ
I	1. 一週間のうち、授業以外にどれくらい時間を使いましたか	1.69	2.43	1.96	2.89	2.57	1.48
	2. この授業に熱心に取り組みましたか	3.60	4.14	3.46	3.84	3.90	4.57
II	1. 教員の授業に対する熱意が感じられる	4.13	4.22	3.94	4.00	4.08	4.52
	2. 教員の話し方は明瞭で聞き取りやすい	3.93	4.04	3.59	3.72	3.75	4.44
	3. 学生の理解度を把握して授業を進めている	3.47	3.82	3.23	3.67	3.72	4.23
III	1. シラバスに、授業の到達目標がわかりやすく書かれている	3.73	3.87	3.61	3.76	3.76	4.02
	2. 授業の到達目標の達成に向けて、授業全体が組み立てられている	3.74	3.96	3.59	3.70	3.85	4.16
	3. 授業時間外の学習（予習復習等）を促す工夫がなされている	2.95	3.78	3.11	3.99	3.98	3.15
	4. この授業は、将来の自分にとって有益である	3.73	4.15	3.51	-	-	-
	5. 授業では教員や学生の間で活発な議論や協力が行われている	-	3.97	-	-	-	-
IV	1. あなたは、この授業の到達目標を達成できましたか	3.45	3.81	3.28	3.48	3.47	4.22
	2. あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか	3.77	4.06	3.48	3.70	3.83	4.48
V	1. 授業の受講者定員数は適切だと思いましたか	3.86	4.31	3.74	-	-	-
	2. この授業は、全学共通（教養教育）科目としてふさわしい内容である	3.98	4.16	3.81	-	-	-
アンケート回答総数		3015	572	3393	2250	1028	881

「非常にそうである・おおむねそうである・どちらともいえない・あまりそうでない・全くそうでない」の5段階評価。数字が大きいほど評価が高い。I-1は、「4時間以上・2～4時間・1～2時間・1時間未満・全くしない」の5段階。なお、「-」は当該科目のアンケートにその質問項目がないことを示す。

* * *

以上のように、本学の教養ゼミナールは、たしかに学生による授業評価は他科目と比べて平均以上の数値と言えるけれども、授業担当者の具体的な悩みは多く、開講場所の問題など制度上の大きな課題も抱えている。この科目をゼミナール Seminar（*seminarium* 苗床、萌芽）の名称の通り、香川大学の新生に教養の種をまき、その芽を大切に育てる苗床としてさらにゆたかにしていくには、本稿で述べてきたいいくつかの改善が必要である。そして、その実現のためには、授業担当者の日常的な努力や工夫だけでなく、担当者以外の先生方によるご理解とご協力が不可欠である。学部や大学全体が協調して、教養ゼミを初年次教育の不可欠な要素として見守り、ときどきにあわせて必要な手入れを続けていかななくてはならない。そういう不断の改善の手だてを講じることによって、私たちは、いつか学生それぞれの美しい花が咲き、立派な実を結ぶのを期待することができる。